

## ヘブル人への手紙13章 「変わらぬイエス・キリスト」

### 1A 互いへの愛 1-6

1B 兄弟への憐れみ 1-3

2B キリスト者の聖潔 4-6

### 2A キリストへの決心 7-17

1B 変わらぬ方にある恵み 7-9

2B 宿営の外に出る覚悟 10-14

3B 真実ないけにえ 15-17

### 3A 祈りと最後の挨拶 18-25

1B 祈り 18-21

2B 挨拶 22-25

## 本文

ついにヘブル書 13 章、最後の章になりました。私たちは信仰による忍耐という話題から、神による訓練によって平和と義の実を結ぶ訓練、そして兄弟たちの間に苦みを持たないように注意する勧めを読みました。そして 13 章に入ります。

### 1A 互いへの愛 1-6

1B 兄弟への憐れみ 1-3

13:1 兄弟愛をいつも持っていなさい。

ヘブル人への手紙、また他の使徒たちの強い勧めは、この兄弟愛であります。ユダヤ人としてその共同体の中で生きていくことが、信仰上、困難になっている時に、互いへの愛と善行、その励ましがこれまで以上に必要でした。10 章 24 節でこう勧めていました。「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。」そして、かの日、すなわち主イエスが到来することを思って、いっしょに集まることをやめたりせずに、希望を抱いてますますそうしようと勧めています。

そして「いつも」と強調していることに注目してください。過去には熱心だったけれども今はやや冷めてしまった、という雰囲気があったので、こう勧めています。ヘブル書 6 章 10 節に、「神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。」とあります。かつては熱心に愛し合っていたのです。しかし、生活において試練を受けて、その熱は冷めてしまいました。

私たち、現代に生きている教会も、以前と全く変わらないように信仰の戦いの中にいます。生活の中でいろいろな困難があって、それで主イエス・キリストへの愛を冷やしてしまう誘惑に取り囲まれています。そのために、共に集まり、共に愛し合い、仕えるという教会の醍醐味から自ら離れていく

人々が多くなっています。ある牧師さんのブログ記事に、今の教会の姿に警鐘を鳴らしているものがありました。長いですが引用してみたいと思います。

\*\*\*\*\*

現代の教会は、ただばらばらな個人が集合しただけの団体のよう。

気に入ったなら加入すればよいし、嫌いになったら電話一本かける煩わしさもなく、無責任に黙って抜けてしまえる。

たとえるなら、救われた者が天国行きの列車を待っている「待合室」

待合室自体は積極的価値を持たず、偶然そこで一緒に列車を待つようになったに過ぎない。いやなら別の場所で待てばよい。

たとえるなら「劇場」

内装を整え、エアコンを効かせ、美しい音楽と、楽しくて有益な講話があり、いつも入場者数を気にして、一喜一憂している。

たとえるなら「ガソリンスタンド」

一週間、仕事でエネルギーを使い果たし、ガソリンの補給にやって来る人が、たまたま顔を合わせて、去っていくにすぎない場所。

しかし、聖書の教える教会は、個人が自分の好みや利益のために選ぶようなものではなく、神が招き、共に生きるように導かれた共同体。神の家族。神の民。

キリストは、この共同体(教会)を実現するために、この世にきてくださったからこそ、弟子たちにこう語った。

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」と

だから、教会では「わたし」と「神」という個人的な信仰ではなく、つねに、「わたしたち」と「神」と、「わたしたち」が主語になるのが、本来の姿。

\*\*\*\*\* 1

しばしば、現代の教会はラオデキヤのようになっている、生ぬるくなっていると言われますが、事実そうでしょう。それは教えにおいて逸脱しているということではなく、自分は満足しているという、まさに今のブログ記事が説明しているような姿です。自分が満たされることだけを求めて、兄弟たちとの交わりや関わりを持たない、自分中心の教会です。

13:2 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。

旅人をもてなす、ということは、当時の社会においては非常に重要なことでした。今のように宿泊施設が整えられている訳ではありません。そして、ここはキリスト者の旅人を想定していると思われる。諸教会に巡回する伝道者や預言者がいました。彼らをもてなすことは、すなわち福音が広が

---

<sup>1</sup> Fuji 牧師の独り言 <http://d.hatena.ne.jp/shuichifujii/2014012>

ることを意味していたのです。

私たちは、海外宣教に行きますと熱いもてなしを受けます。私が聖書を教えるために、体が休まるようにととても環境の良い部屋を用意してくださいます。その背後にあるのは、ここにあるもてなしです。「ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。」というのは、もちろんアブラハムのことです。三人の旅人がいましたが、彼らは御使いで、その一人は主の使い、つまり受肉前の主イエス・キリストご自身でした。ですから、旅人が来る時に主に対するように最大限の尊敬を込めてもてなさない、という意味合いが含まれています。

13:3 牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、また、自分も肉体を持っているのですから、苦しめられている人々を思いやりなさい。

兄弟愛は、もてなしにも表れますが、思いやりところにも表れます。事実、ヘブル人のキリスト者の中に牢に入れられている者たちがいます。彼らは、そのような人々を具体的に助け、彼らの仲間であるとしてそしられた人たちもいました。「あなたがたは、光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めのころを、思い起こしなさい。人々の目の前で、そしりと苦しみとを受けた者もあれば、このようなめにあった人々の仲間になった者もありました。あなたがたは、捕えられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。(10:32-34)」けれども、迫害に耐えられず、キリスト者としての仲間よりも、ユダヤ人としての仲間の中に留まっていようとした人々が現れていたのです。

ここに自分が自分の肉体を大事にするように、牢にいる人々も思いやりなさい、という勧めです。この「肉体」という表現で思い出すのは、エペソ書5章に書かれている、夫への勧めです。そこには、「自分のからだのように、妻を愛しなさい。」とあります。夫は妻の必要について鈍感になってしましますが、自分が大切に養っている自分のからだのことを考えれば、彼女への理解も深まります。これは、牢の中に入っている人に対する態度と同じです。また、キリストの体の説明で、「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。(1コリント 12:26)」私たちは、体であり有機体です。

## 2B キリスト者の聖潔 4-6

13:4 結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。寝床を汚してはいけません。なぜなら、神は不品行な者と姦淫を行なう者とをさばかれるからです。

私たちは前回、12章の学びにおいて、人々と平和を追い求め、聖くなることを追い求めなければいけない、苦い根が出てくると全体を汚す。そして、不品行な者がないようにしなさい、という勧めがありました。これらは実は関連があります。兄弟たちの愛が冷えると、その信仰はキリスト中心ではなく自分中心になります。そうすると、兄弟愛に取って替わるものとして肉の欲で満たそうとします。それが、事実、ユダヤ人の間で起こっていたのでしょう。兄弟愛によって結ばれているから、私たち

は喜びと平安の中で聖さを保っていることができます。

ここにある結婚が尊ばれるようにという命令は、寝床のこと、つまり性的な関係のことです。これを結婚している男女の間で尊ばれるようにしなさいということです。それ以外は、姦淫あるいは不品行です。姦淫とは、既婚者が他の異性と関係を結ぶことですが、不品行は結婚関係以外の全ての性的な関係のことを含みます。

このようなことをしていると、神は裁かれます。キリストを信じている者は、罪に定められることはありませんが、神とキリストとの交わりに傷が生じて、交わりを持ってなくなります。「もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。(1ヨハネ 1:6)」そして天において報いがなくなります。「もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。(1コリント 3:15)」

13:5 金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」13:6 そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましよう。」

12章において、エサウのような俗悪な者がないようにしなさい、という勧めがありました。兄弟愛の中になくなる、自分が兄弟たちの集まりから離れると、すなわち世俗的なものの中に自分を入れてしまいます。「金銭を愛する生活」から自分たちを守る方法をここで教えてくれています。一つは、「いま持っているもので満足しなさい」ということです。主が与えられた者に感謝することです。自分が主が願われているところにいることを知るならば、私たちは無理をして何かを得ようと努力することはなくなります。

そしてもう一つは、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」という約束です。主が共におられることを確信することです。だから、迫害下の中で経済的に逼迫しようとも、主がおられるので安心であります。もしこの安心感がなければ、必死になって働いて世の中に密着しなければいけなくなります。そしてこの安定感は、精神的、心理的な貪欲からも私たちを守ります。世の型に自分を合わせようとして、金銭を愛するようになるのですが、私たちは教会にも型ができて、その型に自分を合わせることによって、人々から受け入れられようと必死になります。しかし、もし主がそのまま私たちと共におられて、見捨てないでおられることを十分に確信すれば、人相手に何かを努力しようという気持ちは起こらないはずで

そして、「私は恐れません。人間が、私に対して何ができましよう。」という約束があります。これは迫害に対する恐れを意味しています。それによって経済的な損失を受けるという恐れがあるけれども、決して人は自分に対して何もすることができないという確信があれば、世に密着する必要はなく

なります。

## **2A キリストへの決心 7-17**

### **1B 変わらぬ方にある恵み 7-9**

13:7 神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。

ヘブル書 13 章は、指導者に従うことが強調されています。ここ 7 節の他に、17 節にある、「指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい」という言葉、そして挨拶の中に、「すべてのあなたがたの指導者たち」によろしく言ってください、という言葉があります。おそらく、ヘブル書の手紙の背景には、指導者たちは、神の恵みとキリストの告白を強く教え、指導していたのでしょう。けれども、その指導に対して苦々しく思ったのか、また他の兄弟たちに苦々しく思ったのか、集まることをやめていく流れがあったように思われます。

ここでは、最近、彼らからいなくなった指導者たちのことを話しています。「思い出しなさい」と著者は言っています。そして、「彼らの生活の結末を見て、その信仰にならいなさい。」と言いました。彼らが力強く福音を語り、骨折って教え、そして苦難も迫害も共に受けていった人々です。彼らをよく見て、その信仰にならいなさい、と言っています。

私たちは、この要素をととても大切にしなければいけません。ヘブル人への手紙では、11 章で雲のように取り巻く旧約時代の聖徒たちが証人となっているという話を読みました。彼らに倣う必要があります。そして 12 章では、私たちの信仰の創始者ご自身から目を離さないでいなさいと勧めました。そして今、最近、殉教か何かで天に召されたか、他の宣教地に動いた指導者たちを思い出しなさいと勧めています。彼らの残した信仰の遺産の中に自分を留まらせておくことは、非常に重要です。

私はこれを、とても個人的に受け止めています。チャック・スミスです。彼の生活の結末を、ほとんど実況中継に近い形で見ました。その語る言葉は、福音と、そして御言葉に根ざした知恵でした。とても単純であり、素朴であり、誰もが語れそうな話ですが、いやだからこそ、教えの風や実践における逸脱から、自分が守られていることを実感しています。もう一度、意識して彼がどのように教え、どのように生きてきたかを思い出しています。

13:8 イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。

この聖句はとても有名ですが、文脈の中で読みますと、「指導者がいなくなったからと言って、イエス・キリストが変わったのではない。」という意味合いになっています。一人の指導者がいなくなれば、その指導者からの指導を受けていないので、新たに自分の考えで聖書を読み直そうと考えます。または、言われたとおりのことを行わず、その指導者が戒めていたこともやり始めようとします。そのようにして、一世代から二世代に移るときに、また二世代から三世代に移るときに、御霊で始まっ

た働きが、人間の作為的な方法論の中で埋没していくのです。

黙示録にある七つの教会は、イエスがいつまでも同じであることを前面に表した啓示があります。紀元 90 年代になり、最後の使徒ヨハネがパトモス島にいるという中で、教会がそれぞれ自分たちのよと思う方向に動いていきました。けれども、指導者はいなくても、復活されたイエス・キリストご自身が、炎のように燃える目をもって、口からは鋭い剣をもって臨んでおられたのです。そして、使徒たちが語っていたイエス・キリストが変容したのではなく、全く同じ方として現れたのです。

13:9 さまざまの異なった教えによって迷わされてはなりません。食物によってではなく、恵みによって心を強めるのは良いことです。食物に気を取られた者は益を得ませんでした。

初代教会において、何を食べるか、何を食べてはいけないか、という、律法の食物規定を守ろうとする教えがはびこっていたことは、他の書簡にも多くでできます。ことに、ユダヤ人信者の中ではこのことは非常に大きな要素だったでしょう。ガラテヤ書には、アンテオケの教会でバルナバやペテロが異邦人信者と食事を取っていたのに、エルサレムから信者たちがやってくると、徐々に席を離れたことをパウロは面前で抗議したことが書かれています。それだけ、食物についての教えは人々の心から離れなかったのです。

しかし、使徒たちはしっかりと神の恵みを宣べ伝えました。これらの律法によって義と認められるのではなく、もっぱらイエス・キリストを信じる信仰によってのみ、心が清められ、神に受け入れられることを語りました。その恵みの福音から徐々に人々が離れていって、異なる教えによって迷わされてしまいます。

何をもち「異なった教え」なのでしょう？それは、ここにあるように「恵みによって心を強められる」こと以外の教えです。キリストが行われたこと以外に、何かキリストだけでは物足りないかのように他の要素を付け足しますと、それが律法主義になります。これは実に、陥りやすい誘惑です。「このようにしたら上手くいくのではないか。」と、それ以外のことを行ない始めるのです。恵みではなく、自分の行ないによって神の働きを完成させようとしています。

## 2B 宿営の外に出る覚悟 10-14

13:10 私たちには一つの祭壇があります。幕屋で仕える者たちには、この祭壇から食べる権利がありません。13:11 動物の血は、罪のための供え物として、大祭司によって聖所の中まで持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるからです。13:12 ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。

今、著者はエルサレムにある神殿において、ユダヤ人たちがいけにえを捧げている祭壇のことを意識しながら話しています。その青銅の祭壇で、いけにえの肉を食べることのできないものは、罪のためのいけにえであり、贖罪日において大祭司は、罪のためのいけにえの血を聖所に携えてい

きます。しかし、肉や汚物などは、宿営の外に運んで、そこで焼かなければいけません。しかし、ヘブル書において、この贖罪日における大祭司の携える血は、新しい契約においてキリストご自身がその肉体から流れる血を、天における聖所に携えることによって、永遠の救いを完成して下さったという真理を伝えました。

そして今は、贖罪日における罪のためのいけにえの、宿営の外で焼かれた肉体について話しています。イエス様が十字架に付けられた場所は現在、考えられるところが二つあります。一つは、聖墳墓教会というところです。ここは、カトリックをはじめ、さまざまキリスト教の教派が管理している、歴史的な教会です。ここが一つ、ゴルゴダではないかと言われている場所です。もう一つは、上の方、「ゴルドンのカルバリ」というのがあります。これはイスラエルの地が英国統治領になっていたとき、ゴルドンという英国将校が、その岩が、しゃれこうべに似ていたのを見て、その地を買い取ったものです。そこには、聖書の記述ときわめて見ている、園の墓があります。ここはプロテスタント信者の人たちが訪れるところです。

そしてこの二つの場所は、どちらも、当時のエルサレムの町の外にありました。当時のエルサレムの北側にあった城壁は、第二北城壁であり、ゴルドンのカルバリだけでなく、聖墳墓教会も城壁の外側にあります。イエス様は城内で十字架刑の宣告を受けられた後、その形の執行のために、エルサレムの外に連れて行かれたのです。したがって罪のいけにえが、イスラエルの宿営の外でその肉体が焼かれたと同じように、主の肉体は、エルサレムの門の外で引き裂かれました。

13:13 ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。

イエス様がエルサレムの外に連れて行かれるとき、もちろん、はずかしめとそしりを受けられました。「お前がキリストで、救い主なら、その十字架から降りてみる。」などののしりを受けられました。そこで著者は今、このそしりをあなたがたも身に負って、宿営の外に出ようではないか、と勧めています。これは、イエスさまがユダヤ人の共同体から疎外されて、エルサレムの町の外に連れていかれたように、ユダヤ人信者たちもユダヤ人の共同体から村八分にされても、キリストのそしりを受けするために甘んじて受けようではないか、ということでもあります。

ユダヤ人たちの誘惑は、まさに共同体の中にとどまりたい、ということでした。自分たちがイエス・キリストを救い主であると受け入れることによって、他のユダヤ人たちから除け者にされることを彼らは恐れました。しかしそれでも、神に近づく、いや神に近づくためには、そのようなそしりを受けなければいけないのです。生まれつきの盲人がそうでした。彼の両親は、ユダヤ人を恐れて彼のことを証言するのをはばかりました。しかし本人はイエスが神から来た方であることを公言し、共同体から除名されましたが、その結果としてイエス・キリストを神の御子として礼拝することができたのです。

13:14 私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求

めているのです。

この地上とは、彼らが目にしていたエルサレムの神殿のことです。彼らは間もなく、この神殿が崩されることを見ることとなります。紀元 70 年に破壊されました。けれども、アブラハムなど族長たちがそうであったように、そして 12 章で信者たちが近づいている、シオンの山、生ける神の都、天からのエルサレムは不動のものです。これを求めているのですよ、ということです。

### 3B 真実ないけにえ 15-17

13:15 ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。13:16 善を行なうことと、持ち物を人に分けることを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。

ユダヤ人信者が捧げるいけにえは、エルサレムにある神殿の捧げ物ではありません。そうではなく、賛美のいけにえです。その口から出てくる果実です。キリストはすでに、これらの動物のいけにえが全うすることができなかつたことを全うされました。罪の赦しと清めを完全に行ってくださいました。ですから、これらのことをする必要はなく、ただその行われたことを賛美する、そのいけにえを捧げればよいのです。私たちが神に貢献できるとしたら、このことでしょう。神はキリストにあって、救いを完成してくださったのです。私たちのお返しは、その業を感謝して、賛美することです。

そして、もう一つのいけにえは、善を行なうことです。旧約聖書の中にも、数々のいけにえを主は忌み嫌う、義を行ない、憐れみを示すことが主の求められるいけにえであると教えていました。同じように、私たちに必要なことは神の愛に動かされた、人々への善の行ないなのです。

13:17 あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人々は神に弁明する者であって、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆いてすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならないからです。

ここは最近いた指導者ではなく、今、彼らを指導している人々のことです。この指導者たちは、先の指導者たちと同じように、神とキリストの恵みの教えをしていたけれども、それに服従しない傾向を持っていました。指導者に対する教えがペテロ書第一 5 章にあり、牧者また長老は、自分に割り当てられている人々を支配するのではなく、群れの模範になりなさいという命令を受けています。ですから、ここでいう服従が模範なしの絶対服従を意味しているわけではありません。

しかし、もし指導者が神の恵みに立ち、その御心の中にいるのであれば、その指導の中にしっかりと留まることが神からの命令です。その理由は、彼らは魂の監督のために、神に弁明しなければいけないからです。監督していなければ、そのことを神から問われるという重大な責任を持っています。牧者は、ただ説教をして、教会の行事を済ませる、雇われ人ではないのです。一人一人の魂が

キリストにあって健全な状態にあるかどうかを注視している人であります。

ここにあるように、服従している人たちには喜んでその権威を行使します。ですから、その指導を受けた人々には、喜びと平安があります。その人は成長する人で、成熟した者となることができ、自分も神から用いられる器として整えられていきます。けれども、反発する人には訓戒であったり、叱責であったり嘆いてその権威を行使しなければいけません。これは悲しいことです。

### **3A 祈りと最後の挨拶 18-25**

#### **1B 祈り 18-21**

13:18 私たちのために祈ってください。私たちは、正しい良心を持っていると確信しており、何事についても正しく行動しようと願っているからです。13:19 また、もっと祈ってくださるよう特にお願いします。それだけ、私があなたがたのところに早く帰れるようになるからです。

著者は、他の指導者と共に、自分たちが正しく行動することができるよう、正しい良心を持っていることができるようお祈りしてと言っています。そうですね、ぜひ指導者のために祈ってください。使徒パウロは他の箇所でも、福音が大胆に語られるように祈ってくださいと頼んでいます。これも必要ですし、指導する時に正しい良心でできるように祈る必要があります。そして旅程についても、祈りが必要であることが分かります。戸が開かれて、彼らのところに行けるように祈ることができます。ですから、私たちも福音宣教や奉仕のための戸が開くための祈りは欠かせません。

13:20 永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、13:21 イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行ない、あなたがたがみこころを行なうことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

著者は祝祷を捧げています。今語ってきた内容と、ヘブル書全体に出てくる主題が織り交ぜられた内容です。「永遠の契約の血による」というのは、偉大な大祭司なるイエス様が血のいけにえを捧げられました。そして「羊の大牧者」とは、今、話した魂を見張っていく者たち、つまり牧者たちのさらに牧者であられる方が、イエス・キリストです。さらに、「私たちの主イエスを死者の中から導き出された」とありますが、イエスが苦しみの中で泣き叫び、その願いがきかれたという箇所がありました。復活によって聞かれました。

そして「平和の神」です。困難な中にあっても、それを耐え忍ぶところにある成熟とそこにある平安の実です。それから、「御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行ない、あなたがたがみこころを行なうことができるために」とあります。私たちが御心にかなうことを行なうのですが、その行いをも神が私たちの内で働いてくださっているからだ、と言っています。神が行い、そして私たちがその働きによって行うのです。そして、「すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。」とあります。この完全な者とは、成熟したものであるということです。これもヘブル書のテー

マの一つでした。教師になっていなければいけない年数になっても、初歩の教えを聞いているということでした。

そしてもう一つ、これはキリストが永遠に世々限りなくあるという、終わりの日の幻も含んでいます。したがってキリストの到来の時に自分も完成された者となるということです。

## 2B 挨拶 22-25

13:22 兄弟たち。このような勧めのことばを受けてください。私はただ手短に書きました。

以上、勧めの言葉でした。手短、と言っていますが、私たちにとって長い手紙だったかもしれませんが、彼にとってはまとめて書き上げたということです。

13:23 私たちの兄弟テモテが釈放されたことをお知らせします。もし彼が早く来れば、私は彼といっしょにあなたがたに会えるでしょう。

ユダヤ人信者にとって、テモテは知られた人でした。そして、牢屋に入っていたようです。他の書簡にはありません。そしてテモテと共に行動していたのがこの著者ですが、私はパウロではないかと思っています。

13:24 すべてのあなたがたの指導者たち、また、すべての聖徒たちによろしく言ってください。イタリアから来た人たちが、あなたがたによろしくと言っています。13:25 恵みが、あなたがたすべてとともにありますように。

とても大事ですが、すべての指導者たちとこの著者は、同じ恵みの福音を伝えていたという、彼らの中の交わりがありました。ガラテヤ書で、エルサレムのペテロやヤコブなどの使徒たちと、パウロやバルナバは、交わりがあったことを示しています。彼らの働きは異なるものでしたが、それは多様な神の働きを示すものであり、実は全く一つであったということです。

そして最後は、「恵み」で締めくくっています。終始一貫、恵みでした。恵みの挨拶をもって神は私たちに臨んでくださいます。